

今年で 21 回目の審査員長を務めさせていただくことに、自分でも驚いています。昨年は世界中にコロナウイルス感染拡大の影響で審査が 1 年延期となりましたが、毎回子どもたちの絵を見るのは楽しく、勉強させてもらっています。

子どもたちの作品は、純粋な気持ちが表れていて非常に清々しく、人間以外の動物・植物が地球という同じ船に乗っていて、家族なんだという気持ちが伝わってきました。最近になって、ようやく大人たちも分かり始めてきたのは、子どもたちの熱い気持ちが大人たちを揺り動かしてきたからではないかと思います。

人間と動物がどこから分かれたのか、それは私たち人間が止まっているものをじっと見る、動物は獲物や葉が揺れるなどの動くものを見る、というのが人間と動物を分かち条件の一つではないかと思います。例えば洞窟にある壁画を見ると、人間だけではなく動植物も描かれています。絵として固定されているもので、その止まっているものをじっと見る、というところから人間の科学が発達していったのではないのでしょうか。例えば、蝶は飛んでいる状態では羽がどうなって動き何故飛んでいるのか分かりませんが、標本にすると隅々まで形を見て体積などを計算し、仕組みが分かります。だから止まっているものをじっと観察する＝見るということが、科学の発達に繋がっていったのではないのでしょうか。絵画は究極の科学とも言えると思います。

応募してくれた子どもたちの作品からは、動的なものを見る、ものを捉えてじっと見る、この相反する見方を両方兼ね備えていると思います。また、私たち大人はこの二つの見方を身体の中でバランスよく咀嚼していかなければならないのだと、教えてくれたのは子どもたちの作品からでした。現在もコロナウイルスの他、戦争や紛争などの様々な問題を抱えています。子どもたちの絵はどれもカラフルで、見ていて楽しいです。こんなに楽しい作品たちの審査をさせていただいて、本当に感謝しています。

審査委員長
画家・東京芸術大学名誉教授
絹谷 幸二